



旅のカタチ

番外編

道の駅や高速道路のサービスエリアで、「みちくさ」という旅の情報誌を手にしたことのある人は多いのでは。実はこれ、宮崎市からの情報発信を試みている会社「アイロード」が出版するフリーペーパー。編集長の福永栄子さん(50)写真1は約10年前、療養に訪れた宮崎で健康を取り戻し、そのまま移住した「旅人」だ。九州への感謝を込め、地域の魅力を掘り起こし続ける福永さんに、これからの九州の「旅のカタチ」を聞いた。(上田輔)

「みちくさ」編集長 福永栄子さん

「交流の旅」が育む地域愛

ふくなが・えいこ 福岡県生まれ。神奈川県やイタリア・ローマで育つ。観光学や国際関係学を学び、高校教諭や国際学会のコーディネーターを経て、米国で国際交流に携わる。米国滞在中に医療事故に遭い、帰国後の2000年、療養先の宮崎市に移住。みちくさの発刊は同年10月で、年約10回、各8万部を九州の約6千カ所に配布している。07年、アイロードを設立し、地域づくりのコンサルタントや特産品の開発・販売にも取り組んでいる。みちくさをB4判という大きいサイズにした狙いは「気軽に持って行かれ過ぎないため」。いつまでも手元に置いて、訪れた場所に思いを寄せてもらうためのサイズという。



の中に旅がある。普段の生活の中での移動が、そのまま旅になっているんです。親戚に会いに行くのに回り道をしたり、ドライブがてらに旬の野菜を買いに行ったり、退職して時間に余裕のある人は、車で2時間くらいの距離は平気で出かけていく。県内の観光施設を訪れる人の

7割は、県内居住者。旅行代理店でも、扱う旅行のほとんどは、個人や少人数の団体旅行者の希望に合わせてルートを提案する「手配旅行」になっています。——いわゆる「体験型」の旅とも、また違いますね。私は、ツーリズムは体験型の旅というより「交流の旅」と

昔から息づいてきたもの そこにツーリズムの文化がある

解釈するのがふさわしいと思えます。「ちよっと行ってくると」と、ぶらりと出かけていく人は、観光旅行をしているのではなく、現地の人と交流しているんです。グリーンとか、スポーツとか、いろいろなツーリズムがあるけど、全てを含むのがエコツーリズム。エコって環境と訳しますけど、自然環境だけでなく、それと共存してきた古くからの生活文化や民俗をも含んだ言葉なんです。元々、開発や観光で存亡の危機に瀕していた世界の希少な生物や先住民族を、旅行者を排除するのではなく、適切な交流を通じて保護していく、というのがエコツーリズムです。ただ楽しむのではなく、「守る」という思いが前提にあるんですね。そのために必要なのが、交流を通じて、旅行者に地域に本当に愛着を持ってもらうことなんです。それが地域づくりにもつながるんですね。

——宮崎での具体的な取り組みを教えてください。昨年11月から今年3月まで、日向・東臼杵広域観光推進協議会で「タビハク ミニ」という企画を仕掛けています。旅の博覧会。交流を求める人たちに、地元の人たちが考えたプログラムを提供するんです。農家でおばあさんとか、おじいちゃんを作るとか、農家民泊で食事を楽しむとか。昨年未までの9回に84人参加して頂いたので、1回あたり約10人。受け入れ人数はそのくらいが限界なんです。宮崎でツーリズムを仕掛けるのに、「奥宮崎」や「奥日向」という言葉を好んで使っています。地理的に奥ということではなく、「奥深い」というイメージですね。これからの旅にとって一番大事なものは、本来そこにあるものを残していくこと。宮崎は、フェニックスやビーチなどのきらびやかなものばかりじゃないんです。神社や神楽など、昔から息づいてきたものがたくさんありますよ。光と陰の、陰の部分こそツーリズムの文化があるんじゃないかな。